

末永直樹ドクターに聞く

上肢の人工関節置換術

関節の痛みを取り、正常な動きの再建を図る治療法

関節の強い痛みや

可動域制限が手術の対象

—— 上肢の人工関節置換術とは、どのような治療方法ですか？

末永 加齢に伴い関節の軟骨がすり減っていく変形性関節症や関節リウマチ、過去のけがを誘因として発生する外傷性関節症、また事故やけがなどによって重度に破壊され修復不能な関節周辺骨折などに対して、関節の破壊されている部分を切除して、金属やプラスチックなど人工材料の関節と置き換える手術です。

関節の痛みの原因を根本的に取り除くことで痛みをなくし、関節の正常な動きを再建することが目的です。この手術を受けることで、多くの患者さんが快適な日常生活を送ることを目指しています。



模型や実際の人工関節を使っての術前説明

肩や肘（ひじ）の関節だけでなく、関節リウマチなどによる手や指の関節の痛みや変形も、この手術の対象となります。上肢の関節が関係する病状は、レントゲン検査で診断します。関節の痛みがひどくて日常生活に支障がある場合や、関節を動かせる範囲が狭くなる（可動域制限）といった症状が出て、レントゲン検査で関節炎の進行やそのほかの病気が見られた場合、一般的に人工関節置換術の適応が考慮されます。

正常な関節の7〜8割の可動域の回復を目指す

—— 手術、リハビリはどのように行われますか？

末永 手術はほとんどの場合、全身麻酔で行います。手術の大まかな流れは、まず関節の周りのじん帯もしくは関節包を切開し、傷んで破壊されている関節を削って平らにします。

その削った部分を金属やプラスチックなどの人工材料の関節で置き換え、骨とのすき間にセメントを充填（じゅうてん）し、緩まないようにします。簡単に言うと、虫歯を削り、そこにセメントを詰めて銀歯をかぶせるといった歯科での治療をイメージしてもらえばいいと思います。手術の合併症としては、ごくまれに金属などにアレルギー反応を示す方がいます。金属アレルギーがある方は、そのことを手術前に医師に必ず伝えてください。なお、人工



整形外科医 末永直樹（すえなが・なおき）氏

1987年旭川医科大学卒業。北海道大学医学部整形外科入局。2003～2005年シドニー大学ロイヤルノースショア病院整形外科、06年日欧肩関節学会交換フェロー（ヨーロッパ）、07年北海道大学医学研究科 人工関節・再生医学講座 特任准教授を経て、08年より医療法人社団朋仁会整形外科北新病院。北海道大学病院客員臨床教授。
末永直樹ウェブサイト <http://dr-suenaga.net/>



病状によっては、MRI、CTなどの画像診断を駆使して治療方針を決定する



が可能な方であれば、術後3日で退院できるケースもあります。リハビリは、関節周辺の筋肉を少しずつ鍛える運動をしていきます。週2〜3回のリハビリ通院で、肩であれば約3カ月、肘、手、指であれば1〜2カ月で、正常の関節の7〜8割の可動域の回復を図ります。

術後の状態が順調でも、

定期的な受診が必要

—— 術後、人工関節は何年程度機能を保つことができますか？

末永 人工関節の寿命は、患者さんの身体的条件や活動程度など多くの要素に影響されますが、一般的に10年以上は持つと考えられています。ただし、人工関節を使用していると、緩んだり、摩擦する場合があります。緩みは、人工関節の固定性が悪くなってしまうことです。摩擦は、主に人工関節を構成するプラスチックの部分に見られます。それぞれの状況に応じて、再度新しい人工関節に入れ替える手術を行います。その際、人工関節をすべて取り替える場合と、交換が必要なものだけを取り替える場合があります。

退院後に生活を続けていく中で最も大切なことは、痛みなどの問題がなくても、初回手術後から定期的に外来を受診することです。1年に1回を目安にするとよいでしょう。レントゲン検査により、緩みや摩擦などの問題が早期に発見され、再置換術も容易となります。上肢の関節の痛みや変形の治療は、人工関節置換術だけではありません。それぞれの症状に合った最適な治療法を選択できるように、相談しながら決めていきます。長い間、痛みや変形で苦しんでいる方は、ぜひ一度専門医を受診し、相談してみてください。



術後は、人工関節周囲の筋肉を鍛えながら、正常な関節の動きを取り戻すリハビリ計画を開始する



医療法人社団朋仁会 整形外科 北新病院

住所／札幌市白石区菊水元町3条3丁目1-18
電話番号／011-871-3660
ホームページアドレス／<http://www.hokushin-hp.or.jp>

企画制作／北海道新聞社広告局